



## 『人間喜劇』における「娼婦の食卓」

|       |                                                                                                                                       |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | <p>言語: jpn</p> <p>出版者:</p> <p>公開日: 2018-04-06</p> <p>キーワード (Ja):</p> <p>キーワード (En):</p> <p>作成者: 村田, 京子</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p> |
| URL   | <p><a href="https://doi.org/10.24729/00002791">https://doi.org/10.24729/00002791</a></p>                                              |

## 『人間喜劇』における「娼婦の食卓」

村田京子 \*

バルザックの『人間喜劇』には、饗宴と密接な関わりのある娼婦が多く登場する。例えば、『娼婦盛衰記』(1847)において、娼婦のエステルが修道院生活で憔悴状態に陥った時、カルロス・エレーラが彼女を連れて行くのがロシェ・ド・カンカル<sup>1</sup>で、「哀れな娘にかつての大饗宴を思い起こさせるような素晴らしい夕食<sup>2</sup>」を味あわせることで、活力を取り戻させようとしている。本論では『人間喜劇』における「娼婦の食卓」の象徴的な意味を探るために、食べ物と娼婦との関係を分析していきたい。作品としてはまず、『人間喜劇』の中で娼婦が最初に登場する『あら皮』(1831)、次に地方の娼婦を扱った『ラ・ラブイユーズ』(1841)、最後にバルザックの娼婦像の集大成とも言える『従妹ベット』(1846)の三作品を主に取り上げて検証していく。

### 1. 『あら皮』

『あら皮』では、主人公のラファエル・ド・ヴァランタンが魔法の護符「あら皮」を前にして「王侯たちに相応しい豪華な饗宴<sup>3</sup>」を望んだ後、参加するのが銀行家タイユフェールの宴会である。19世紀当時の饗宴は、18世紀のフランス式サーヴィスに厳密に則ったもので、主に三つのサーヴィスからなる。第一サーヴィスはポタージュ、ルルヴェ [ソース煮にした肉や魚料理、パテ] とアントレで構成され、第二サーヴィスはロ [焼肉] とアントルメ、第三サーヴィスはデザートで、サーヴィスごとに全ての料理が同時に食卓に運ばれる<sup>4</sup>。タイユフェールの宴会はこうした食事のサー

---

\* 大阪府立大学人間社会システム科学研究科 人間科学専攻。本稿は2017年9月23日に開催された国際シンポジウム *Balzac et la représentation de la Table* において、フランス語で発表した原稿をもとに日本語論文に書き直したものである。

<sup>1</sup> 1804年にアレクシス・バレーヌがパリの中央市場に開いたレストランで、美味で洗練された料理を出す店としてロシアの王族や各国の大使が詰めかけ、グリモ・ド・ラ・レニエールなど、食通が集まったことで有名である。ロシェ・ド・カンカルについては、以下の文献を参照のこと。Jean-Paul Aron, *Le mangeur du XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Belles Lettres, 2013, pp.35-38; Patrice Roussel, *Les restaurants dans La Comédie humaine*, Éditions de la Tournelle, 1950, pp.75-83.

<sup>2</sup> Balzac, *Splendeurs et misères des courtisanes*, Paris, Pléiade, t.VI, 1977, p.470.

<sup>3</sup> Balzac, *La Peau de chagrin*, Paris, Pléiade, t.X, 1979, p.87.

<sup>4</sup> Cf. Jean-Paul Aron, « Le dîner-spectacle au XIX<sup>e</sup> siècle », in *À Manger des yeux. L'esthétique de la nourriture*, Boudry-Neuchâtel, Editions de la Baconnière, 1988, pp.57-58. 会食者全員に様々な料理を

ヴィスに忠実に従っているが、ジュリア・プルジボスが指摘しているように、「宴会の描写において、バルザックは料理よりも食堂の贅沢さを強調している<sup>5</sup>」。その証拠として、次のようなくだりを挙げておこう。

会食者たちはそれぞれ、降ったばかりの雪のように真っ白なテーブルクロスのかかった長い食卓の豪勢なさまに、まず言葉よりも眼差して驚嘆の念を表した。食卓には小さな黄金のパンを添えた食器一式が対称的に並べられていた。クリスタルガラスの器は、星のように輝く反射のなかに虹色を映し出し、ろうそくは光を無限に交差させ、銀の蓋の下に隠された料理は食欲と好奇心をそそった<sup>6</sup>。

上記の引用では、クリスタルガラスの器や銀の蓋など、豪華な食器セットが詳細に描写されている。その一方で、出される料理についてはほとんど言及されていない。会食者たちの交わす会話の中に、「アスパラガスを回してくれ<sup>7</sup>」といった言葉が差し挟まれるのみである。エミール・ゾラが『ナナ』の中で娼婦ナナの夜会のメニュー<sup>8</sup>を詳細に描いているのとは対照的に、バルザックは料理の説明の代わりに「第一サーヴィスは見事なさまで出てきた。それは亡きカンバセレス [ナポレオン時代の法律家で、美食家として有名] に敬意を表するものであり、ブリヤ=サヴァランも称賛したことだろう<sup>9</sup>」と述べるに留めている。

作者が宴会のメニューの詳細に触れないのは、無知によるものではない。ピエール・シトロンの指摘しているように、「バルザックはこの点に関して、ダブランテス公爵夫人から直接、情報を得ることができたであろう。夫人は『回想録』の中で、カンバセレスの夕食について多くの頁を割いていた<sup>10</sup>」。確かにこの当時、バルザックは愛人のダブランテス夫人の『回想録』執筆を手伝ったとされ、その内容を熟知

---

時系列的に均一に分配するロシア式サーヴィスがフランスで広まったのは 19 世紀末の第二帝政期で、それまでのフランス式サーヴィスでは会食者は大皿の料理を取り分けて食べ、座る位置によって食べられる料理が違っていた。

<sup>5</sup> Julia Przyboś, *Les aventures du corps masculin*, Paris, Corti, 2012, p.60, la note 22.

<sup>6</sup> *La Peau de chagrin*, p.97. 下線引用者。今後、引用における下線はすべて引用者によるものである。

<sup>7</sup> *Ibid.*, p.101.

<sup>8</sup> 一例として次のようなくだりを挙げておこう。「ルルヴェの後、アントレが出たところだった。蒸し焼きの若鶏と、辛みソースをかけた舌平目のフィレとフォワ・グラのエスカロープ (薄切り) だった」 (Zola, *Nana*, Paris, GF Flammarion, 2000, p.131).

<sup>9</sup> *La Peau de chagrin*, p.97.

<sup>10</sup> Pierre Citron, Note 1 de la page 97 de *La Peau de chagrin*, p.1259.

していたはずである。その上、1820 年代に若きバルザックが親しくつきあっていたオラース・レッソンも、その著『美食家の不滅の年鑑』(1830) の中で、美食家グリモ・ド・ラ・レニエールが称賛したカンバセレスのメニュー<sup>11</sup>に言及している。バルザックがこうした情報を参照しなかったのは、ジャン=ポール・アロンが呼ぶところの「贅沢嗜好 (le goût du somptuaire)<sup>12</sup>」を強調したかったためであろう。「贅沢嗜好」は 18 世紀の貴族階級に遡り、その方針として、食事は消費されるためではなく、会食者の視線を楽しませることに重きが置かれていた。要するに、贅沢な装飾こそが接待主の威光を表象していたのだ。上記の引用で、会食者たちが豪華な食卓に称賛の視線を投げかけているのが、その証拠と言えよう。このように作者は、タイユフェールを自らの富を誇示するだけではなく、貴族階級特有の「贅沢嗜好」を我が物とする、成り上がりのブルジョワとして読者に提示している。

しかしながら、第一サーヴィス、第二サーヴィスについては口数の少なかった作者が、デザートに関しては全く違う語りの手法を展開している。

まるで魔法をかけられたようにデザートの用意ができていた。食卓にはトミールの工房で作られた金めっきされたブロンズの大きな装飾盆が載っていた。有名な芸術家の手による、ヨーロッパで理想美を表すお決まりの形をした背の高い人物像に支えられて、盆にはピラミッド型に盛り付けられた苺、パイナップル、新鮮なナツメヤシ、黄色いぶどう、黄金の桃、[ポルトガルの] セチュバルから船で運ばれてきたオレンジ、ざくろ、中国の果物、そしてあらゆる贅沢の驚異、奇跡のようなプチフル、この上なくおいしそうな菓子、この上なく魅惑的な砂糖菓子が載っていた。この美食の構図の色彩は、磁器の輝きや煌めく金の縁取り、壺の切り込み模様によって一層引き立っていた。大洋の水の房のように優雅な、緑

<sup>11</sup> カンバセレスが 20 人の客のために用意した第一サーヴィスのメニューは、次のようなものである。« 4 potages (Une bisque d'écrevisse, Un potage à la reine, au lait d'amandes et biscottes, Une julienne aux pointes d'asperges, Un consommé de volaille), 4 relevés (Un brochet à la Chambord, Une dinde aux truffes, Un turbot, Une culotte de bœuf au vin de Madère, garnie de légumes), 12 entrées (un aspic de files mignons de perdreaux, Une jardinière, Filets de poularde, piqués aux truffes, Des perdreaux rouges au fumet, Des filets de mauviettes sautés, Des scalopes [sic] de poularde au velouté, Des filets de lapereaux en turban, Un vol-au-vent à la financière, Des ailerons piqués à la chicorée, Deux poulets de grain au beurre d'écrevisses, Des scalopes [sic] de saumon à l'espagnole, Des filets mignons piqués de truffes » (Horace Raisson, *Almanach perpétuel des gourmands, contenant le Code gourmand*, Paris, J.-N. Barba, 1830, p. 225).

<sup>12</sup> Jean-Paul Aron, « Le dîner-spectacle au XIX<sup>e</sup> siècle », p.59.

色の軽やかな蘇類がセーヴルで模写されたブッサンの風景画を飾っていた<sup>13</sup>。

上記の引用では、バルザックは産地も色彩もヴァリエティに富んだ様々な果物や菓子を列挙し、そのピトレスクな様相を浮き彫りにしている。とりわけ、「理想美 (la beauté idéale)」「優美さ／菓子 (délicatesses)」「魅惑的 (séductrices)」「優雅な (gracieuse)」といった言葉は、官能的な女の肉体を想起させる。それはまさに、デザートの上に娼婦たちが登場する前触れであった。実際、会食者たちがコーヒーを飲むためにサロンに移ると、「招待主によって彼らの最も官能的な感覚に差し出された、気をそそる光景<sup>14</sup>」が眼前に繰り広げられる。

金色のシャンデリアを飾る煌めくろうそくの下で、金めっきした銀のテーブルの回りに、女たちが […] 狼狽する会食たちの前に突然、姿を現した。女たちの装身具は贅沢なものであったが、さらに豪華なのは、眩いばかりに美しい女たちで、彼女たちを前にしてはこの邸宅の見事な品々もすべてかすんでしまった。妖精のように魅惑的な女たちの情熱的な眼差しは、[…] 煌めく光の流れにもまして活気に満ちていた。彼女たちの揺れ動く髪型や、魅力や性格が様々に異なるその姿態がコントラストをなすのを見て、男たちの心は燃え立った<sup>15</sup>。

この描写では、デザートと娼婦たち——その出身地や性格、魅力がそれぞれ異なる女たち——との相関関係が容易に見て取れる。「まるで魔法にかけられたかのように」出現したデザートと同様に、「妖精のように魅惑的な」娼婦たちがオリエンタの物語のように突然、姿を現わしている。彼女たちは言わば、男たちに差し出された「食べ物」であった。『従妹ベット』においても、ヴァレリー・マルネフが「美しい皿に艶めかしく並べられ、ナイフの刃が切りたくてむずむずするような素晴らしい果物<sup>16</sup>」に喩えられている。アンカ・ミュルシュタインが指摘しているように、バルザックにおいて「果物と性的欲望の同一視<sup>17</sup>」がしばしば見出せる。

『あら皮』の娼婦たちの中で、脚光を浴びるのがアキリナとウーフラジーである。

<sup>13</sup> *La Peau de chagrin*, pp.106-107.

<sup>14</sup> *Ibid.*, p.109.

<sup>15</sup> *Ibid.*, pp.109-110.

<sup>16</sup> Balzac, *La Cousine Bette*, Paris, Pléiade, t.VII, 1977, p.212.

<sup>17</sup> Anka Muhlstein, *Garçon, un cent d'huîtres ! Balzac et la table*, Paris, Odile Jacob, 2010, p.13.

逞しさと「豹のような敏捷さ」を合わせ持ち、「身を焼き尽くすような快樂 (les voluptés dévorantes)」<sup>18</sup>を約束するアキリナに対して、ウーフラジーの方は華奢で天使のような外見の下に「情けを知らぬ一種の悪魔<sup>19</sup>」と形容される冷酷さを秘めている。両者は互いに対極にあるが、二人とも『従妹ベット』に登場するジョゼファと同じ「本物の娼婦 (vraie courtisane)」<sup>20</sup>の範疇に属している。ウーフラジーは「私に何百万か下さいな、たちまち使い果たしてみせるわ (je les mangerai)。びた一文だって年越しに取っておこうなんて思わない<sup>21</sup>」と誇らしげに宣言している。アキリナも付け加えて、「私たちはお堅いブルジョワ女が 10 年かけて経験すること以上のことを、わずか一日で生きているのよ<sup>22</sup>」と語っている。このように、二人はお金を浪費するだけではなく、命さえも惜しまない。ラファエルが「長生きするために感情を殺すか、情熱の殉教者となることを受け入れて若くして死ぬか<sup>23</sup>」という二者択一の生き方のうち、「あら皮」を受け取ることで後者の生き方を選んだのと同様に、彼女たちも単調な人生よりも激しい生き方を選択している。ジョゼファも同様に、女のために金を浪費して困窮状態に陥った放蕩者ユロに彼女が同情を抱くのは、彼が「ごくつぶし (mange-tout)」<sup>24</sup>であったからだ。彼女も「幾つかの財産を食い尽す陽気な自由奔放さ (la joyeuse fantaisie qui dévore des fortunes)」<sup>25</sup>を体現していた。

こうしたタイプの娼婦に関して興味深いのは、その特徴を示すのに、バルザックがしばしば「食べる (manger)」「食い尽す (dévorer)」といった消化作用に関連する用語を使っていることだ。その結果、彼女たちは男たちの「食べ物」として消費の対象に還元されると同時に、彼らの財産や生命、さらには自らの命も「食い尽す」存在となる。

<sup>18</sup> *La Peau de chagrin*, p.112.

<sup>19</sup> *Ibid.*, p.114.

<sup>20</sup> *La Cousine Bette*, p.188.

<sup>21</sup> *La Peau de chagrin*, p.115.

<sup>22</sup> *Ibid.*, p.116.

<sup>23</sup> *Ibid.*, p.118.

<sup>24</sup> *La Cousine Bette*, p.358.

<sup>25</sup> *Ibid.*, p.188.

## 2. 『ラ・ラブイユーズ』

『ラ・ラブイユーズ』では、フロール・ブラジエという地方の娼婦が登場する。彼女は「ラ・ラブイユーズ (la Rabouilleuse)<sup>26</sup>」と渾名される魅力的な娘で、12歳の時にルージェ老医師に召使いとして売り渡され、ルージェ亡き後は息子のジャン＝ジャックに引き継がれる。27歳で、フロールの美貌は爛熟の極みに達する。

脂ぎっているが瑞々しく、ベッサンの農婦のように色白で、我々の祖先が美しいおかみさん (une belle commère) と呼んだ理想の体型をしていた。彼女の美しさは素晴らしい宿屋の看板娘の美しさに似ているが、太って豊満で、[...] 全盛期の[女優] ジョルジュ嬢を彷彿とさせた。フロールはあの艶々とした丸みを持つ美しい腕、あの繻子のように滑らかな果肉、かの女優よりも柔らかな表情をした魅力的な顔立ちをしていた<sup>27</sup>。

フロールは、熟した果物を彷彿とさせる「繻子のように滑らかな果肉 (pulpe satinée)」という表現によって、「果物＝官能的な女」として立ち現れている。それゆえ、画家のジョゼフ・ブリドーが彼女をティツィアーノの肉感的なヴィーナス (図1) に喩えている<sup>28</sup>のも不思議ではない。興味深いことに、バルザックは『幻滅』(1843)で、安食堂のフリコトーで出されるジャガイモが「ティツィアーノが好んだあの黄金色<sup>29</sup>」を帯びていると表現している。上記の引用で「農婦」や「宿屋の看板娘」に喩えられるフロールと、フリコトーのジャガイモにはある種の類似が見出せ、彼女は『あら皮』の娼婦たちと同様に、「食べ物」と同一視されている。しかし後者とは

<sup>26</sup> « la Rabouilleuse » という渾名は、ベリー地方の方言 « rabouiller » [「太い木の枝で川の水をかき混ぜて水を乱す行為」(La Rabouilleuse, Paris, Pléiade, t. IV, 1976, p.386) を意味し、ザリガニを獲るために編み出された手法であった] に由来する。その象徴的意味に関しては、村田京子「バルザック『ラ・ラブイユーズ』のタイトルを巡る考察」、『バルザック、フローベール 作品の生成と解釈の問題』、Global COE Program「テキスト布置の解釈学的研究と教育」第2回国際研究集会報告書(名古屋大学大学院文学研究科刊行)、2008年を参照のこと。

<sup>27</sup> La Rabouilleuse, p.403. 傍点の強調は作者自身による。

<sup>28</sup> ジョゼフはフロールを見て、次のように叫んでいる。「描くのうってつけの体つきだ！ 何と素晴らしい肉の色！ ああ！ あの美しい色合いと何と均整の取れた体つき、何という丸み、肩つきなのだ！ 素晴らしい女像柱そのものだ！ まさにティツィアーノのヴィーナスの名だたるモデルのようだ」(Ibid., p.435)。

<sup>29</sup> Balzac, Illusions perdues, Paris, Pléiade, t. V, 1977, p.295.





図1：ティツィアーノ 《ウェヌス・アナデュオメネ》  
(海から上がるヴィーナス) (1525)

違い、フロールは「[美食家の] 医者仕えののに相応しいコルドン・ブルー<sup>30</sup>」と呼ばれる料理女ファンシェットの下で、料理の奥義を掴みとり、ジャン=ジャックへの支配力を強めようとする。バルザックは、地方生活を次のように説明している。

地方ではすることがなく、単調な生活のため、精神の活動は料理の方に惹きつけられる。地方ではパリほど贅沢な食事はしないが、食事の質は高い。料理はじっくり検討され、周到に準備される。片田舎にはスカートをはいたカレーム [タレーランに仕えたことで有名な料理人] が何人も存在する。彼女たちは知られざる天才で、何の変哲もないインゲン料理を、[食通の] ロッシーニが完璧な料理に対して見せるあの首振り [称賛の印] に値するような逸品に仕立て上げる<sup>31</sup>。

このように、地方では性的魅力の他に、料理に長けていることが男に対する支配の手段となる。「揚げ物や焼き物の才能——観察や鍛練によって身につけることので

<sup>30</sup> *La Rabouilleuse*, p.400. バルザックは作中で、「こと美食に関しては、医者をも司教と同列に置くことができる」(p.400) と述べ、ルージュ医師が化学理論を応用して料理の質の向上を目指したことを詳細に描いている。

<sup>31</sup> *Ibid.*



きない二つの能力——に生まれつき恵まれた<sup>32</sup>」フロールは、たちまちファンシェットを凌ぎ、ファンシェットが去ってからはその腕前を発揮するようになる。ジュリア・ブルジボスの言葉を借りれば、彼女は「ジャン=ジャックの熱情を維持するために巧みに作った料理を念入りに準備した。肉欲を掻き立てたり欲求不満にしたりすること、それが主人を支配下に置くために召使い女が採用した方法であった<sup>33</sup>」。二人の支配関係は逆転し、フロールの方が主人に対する絶対権力を獲得する。

フロールは、マクサンス・ジレと肉体関係を持つてからは家の主人として振舞い、司祭の元料理女で素晴らしい料理の腕を持つラ・ヴェディを雇うようになる。さらに彼女は、御馳走を大量に食べさせることで、ジャン=ジャックの性欲を抑制しようとする。それに関しては、バルザックは、性生活と食養生を結びつけて考える当時の衛生学者たちの医学的言説に忠実に従っている。衛生学者の一人、ポール・ゴベール医師は次のように指摘している。

このように普段よりもたっぷりした料理、刺激的な飲み物の濫用は中枢神経を塞ぎ、肉体の感覚を鈍らせ、男の内の生殖器官の訴えを抑制する。そうになると、男の欲望は無駄になり、その挑発は不成功に終わって身体器官は休止してしまう。胃に過剰に負担をかけたり、刺激物を濫用したりする習慣は、生命力を消化器官に専ら向かわせて悪い結果をもたらし、精力を減退させ、さらには性的不能にまで陥らせる<sup>34</sup>。

ゴベールの言説に従えば、過剰に食べさせることは去勢行為に等しいことになる。ジャン=ジャックはフロールの策略によって、次第にほぼ植物状態に陥っていく。

ルージェは美食の道に投げ込まれ、ラ・ヴェディが作る素晴らしい料理に突き動かされて、ますますがつがつと食べるようになった。美味でたっぷりした料理にも関わらず、彼はあまり太らなかった。恐らく消化不良のせいか、疲労困憊した男のように日増しに憔悴していき、その眼には隈ができていた<sup>35</sup>。

<sup>32</sup> *Ibid.*, p.401.

<sup>33</sup> Julia Przyboś, *op. cit.*, p.92.

<sup>34</sup> Paul Gaubert, *Hygiène de la digestion, suivie d'un nouveau dictionnaire des aliments* [sic], Liège, Lardinois, 1849, p.107.

<sup>35</sup> *La Rabouilleuse*, p.408.

ジャン=ジャックは、この「真に吸血鬼的な料理<sup>36</sup>」によって活力を奪われ、目に見えて衰弱していく。フロールは最後には彼を「老人の中でも最も衰弱した<sup>37</sup>」男に変容させたため、後に彼と正式に結婚して子どもを設けようとしても無駄な努力となる。『娼婦盛衰記』においても、エステルが料理という手段を用いて、ニュシングエン男爵に身を任せる時をできるだけ遅らせようとしている。カルロス・エレーラが彼女のために用意したのが、アジアという名の料理女で、アジアは「美食家の貴族<sup>38</sup>」に仕え、「カレームでさえ嫉妬心を掻き立てられるほど<sup>39</sup>」の腕前であった。ニュシングエンはエステルに豪華な屋敷を用意して、彼女との快樂の一夜を期待する。しかし料理女が作った、香辛料の効いた盛り沢山のアジア料理によって、彼の欲望は挫かれてしまう。

料理は香辛料が効いていて、男爵に消化不良を引き起こし、その結果、彼は早々に自宅に戻ってしまった。したがって、快樂に関して、エステルとの最初の会見に彼にもたらしたものはそれだけであった<sup>40</sup>。

実際、ゴベール医師は「すべての動物において、食べ物に対する雄の節制が性的能力の最も確かな保証となる<sup>41</sup>」と断言している。エステルの屋敷の新築祝いの日、ニュシングエンは、あたかも衛生学者の忠告に従ったかのように、宴会で食べ物も酒もほとんど口にしていない。こうした摂生のおかげで、その晩、彼はエステルから「この世のものとは思えない快樂<sup>42</sup>」を享受することができた。それに対して、ジャン=ジャック・ルージェは、過度の飲食または性行為のせいで死ぬことになる<sup>43</sup>。甥のフィリップによって極端な快樂に溢れるパリーに連れて来られた彼は、「心地よい死 (agréable mort) <sup>44</sup>」を運命づけられていた。「オペラ座の端役女優の中でも一、二を争

<sup>36</sup> Julia Przyboś, *op. cit.*, p.93.

<sup>37</sup> *La Rabouilleuse*, p.519.

<sup>38</sup> *Splendeurs et misères des courtisanes*, p.482.

<sup>39</sup> *Ibid.*, p.484.

<sup>40</sup> *Ibid.*, p.620.

<sup>41</sup> Paul Gaubert, *op.cit.*, p.107.

<sup>42</sup> *Splendeurs et misères des courtisanes*, p.691.

<sup>43</sup> 『あら皮』の宴会の中で資産家の叔父から遺産を受け取るために「叔父を殺す方法」——叔父にフォア・グラのパテを食べさせるか、またはきれいな娘をあてがうかのどちらか——がすでに言及されている (*La Peau de chagrin*, pp.101-102)。

<sup>44</sup> *La Rabouilleuse*, p.521.

う美貌」のロロットが彼の「愛すべき殺人者 (aimable assassin)」となる<sup>45</sup>。語り手は、彼の死を皮肉な口調で次のように語っている。

ルージェは […] 豪華な夜食会のあとに死んだ。それゆえこのベリー地方の老人の命を奪ったのは、夜食なのか、ロロット嬢なのか、その判断をするのは難しかった。ロロットは死の責任を一切れのフォワ・グラのパテに負わせた。このストラスブール産の一品は反論することが出来なかったので、老人は消化不良のせいで死んだというのが定説となった<sup>46</sup>。

まさに、ブリヤ=サヴァランが『味覚の生理学』で読者に警告しているように<sup>47</sup>、消化作用のリズムに従って性生活を調節しなければ、死ぬことになる。

### 3. 『従妹ベット』

『従妹ベット』では、ヴァレリー・マルネフという新しいタイプの娼婦が登場する。すでに見たように、ヴァレリーもその魅惑的な肉体を「食べ物」として男たちに差し出し、しかも彼女は「愛における料理術 (science culinaire en amour) <sup>48</sup>」に長けている。しかしながら、「野心的な亭主持ちの娼婦 (ambitieuses courtisanes mariées) <sup>49</sup>」の一人に数えられる彼女は、その偽善的性格によってジョゼファのような「本物の娼婦」と一線を画している。

ジョゼファ […] のような本物の娼婦は立場を率直に表明し、売春宿の赤い提

<sup>45</sup> *Ibid.*

<sup>46</sup> *Ibid.*

<sup>47</sup> 「消化が開始されている時に知的活動に耽るのは危険である。いわんや性的快楽に身を委ねることはさらに危険である。首都の墓地に向かう流れの中には、御馳走をたっぶり食べた後、時には食べ過ぎた後で、目を閉じ耳を塞ぐ術を知らなかったために命を落とした人が毎年、数百人はいるとのことだ。」(Brillat-Savarin, *Physiologie du goût*, Paris, Flammarion, 1982, p.190)

<sup>48</sup> *La Cousine Bette*, p.319. 語り手は、ユロの貞節な妻アドリーヌとヴァレリーの違いを次のように説明している。「貞淑で威厳のある女性はさしずめホメロス風の食事、燃え盛る炭の上に投げ込まれた肉ということになる。それとは逆に娼婦は薬味やスパイスを使って趣向を凝らした、カレームの手になる御馳走だ」(319)。

<sup>49</sup> *Ibid.*, p.188.

灯、賭博場のケンケ燈と同じくらい明るい光の警告を発している。だから男は、それが自分の破滅につながるということを知っている。しかし […] 既婚の女の猫かぶりの貞淑ぶり、美德の見せかけ、偽善的な物腰は、知らず知らずのうちにぱっとしない破滅に男を引きずり込んでしまう<sup>50</sup>。

このように、「本物の娼婦」の「率直」さと「亭主持ちの娼婦」の「偽善」が売春行為において対極を成している。それだけではない。経済システムにおいても両者には大きな相違点が見出せる。15歳の時にクルヴェルに売られたジョゼファは、男の手から手へと流通する一種の「商品」でしかない。需要と供給の市場体系に組み込まれた女の肉体は、交換価値に還元されてしまう。エステルやラ・ラブイユーズも同様である。ヴァレリーもまた同じ市場原理に巻き込まれているとはいえ、彼女は自らの意志で「自分の美貌を商品にする<sup>51</sup>」ことを決意している。その上、「結婚した娼婦 (*courtisane mariée*)」として、彼女は結婚を重ねるたびに社会的上昇を果たしている<sup>52</sup>。要するに、ヴァレリーは全てを蕩尽するどころか、その心が「金庫<sup>53</sup>」に喩えられているように、富の蓄積に邁進している。まさに、娼婦のブルジョワ化が生じていると言えよう。

この点に関してヴァレリーは、ウージェーヌ・ド・ラスティニャックを始めとする野心的な青年たちと同様、食の次元での上昇運動に身を投じている。『ゴリオ爺さん』(1835)では、ラスティニャックはヴォケー館に代表される世界と、名門貴族ボーセアン夫人の壮麗な屋敷が体現する世界との間を往来する。ボーセアン夫人を訪ねたラスティニャックがヴォケー館に戻ってくる場面で、食卓を囲む下宿人たちは、彼の眼には次のように映っている。

ヌーヴ=サント=ジュヌヴィエーヴ通りに着くと、彼は素早く自分の部屋に上がり、馬車の御者に10フランを渡すために階下に降りてきた。そして、この吐き気を催すような食堂にやって来た時、秣棚の家畜のように18人の会食者たちが餌を食べているところを眼にした。この惨めなありさまと食堂の眺めは、彼にと

<sup>50</sup> *Ibid.*

<sup>51</sup> *Ibid.*, p.186.

<sup>52</sup> ヴァレリーは下級官吏の夫マルネフの死後、レジョン=ドヌール章を佩用し、パリ区長にもなるブルジョワ、クルヴェルと結婚し、クルヴェル亡き後は貴族のアンリ・モンテス・ド・モンテジャノス男爵との結婚を企んでいた。

<sup>53</sup> *La Cousine Bette*, p.188.

っておぞましいものであった。見た光景の移り変わりがあまりにも急激で、あまりにも完璧なコントラストを成していたため、彼は心の中で、野心を際限もなく膨らませずにはいられなかった<sup>54</sup>。

引用下線部の「吐き気を催す (nauséabonde)」という侮蔑的な意味合いの形容詞や、下宿人たちを動物扱いする表現——「秣棚の家畜 (des animaux à un râtelier)」「餌を食べる (se repaître)」——は、ジェームズ・W・ブラウンが指摘しているように<sup>55</sup>、貧困に対するラスティニャックの嫌悪と恐怖を反映している。この光景を見て彼は、どんな代価を払っても社会的成功を得ようと決意するのだ。そして、ヴォケー館とコントラストを成すボーセアン家の贅沢な食卓<sup>56</sup>を目撃することで、「窮乏生活よりも常に優雅なこちらの生活の方を好む<sup>57</sup>」ようになる<sup>58</sup>。それゆえ、彼の社会的・経済的成功は、彼が取る食事と密接に関わっている。すなわち、ラスティニャックが訪れるレストランや宴会の格付けは、自らの社会的上昇のそれぞれの段階に照応しているのだ。

ヴァレリー・マルネフも同じような社会的成功の道を辿っている。彼女が初めて物語に登場する場面では、マルネフ家の逼迫した経済状況が夕食のメニューを通して語られる。作者は「パリの家庭では食卓こそが財政状態の最も確実なバロメーターである<sup>59</sup>」と述べた後、マルネフ家の食卓を次のように描写している。

インゲン豆の入った野菜スープ、肉汁の代わりにルーに浸したジャガイモ添えの子牛肉の塊、インゲン豆の皿に安物のチェリー、こうしたメニューの品が縁の欠けた大皿・小皿に載って食され、響きの悪い洋銀製のナイフとフォークが添えら

<sup>54</sup> Balzac, *Le Père Goriot*, Paris, Pléiade, t.III, 1976, p.118.

<sup>55</sup> James W. Brown, *Fictional Meals and Their Function in the French Novel, 1789-1848*, Toronto, University of Toronto Press, 1984, p.36.

<sup>56</sup> バルザックはボーセアン氏を「快楽に飽きた多くの人々と同じように、美食以外には人生の楽しみがなくなった人物」として描き、次のように続けている。「彼の食卓は、食器の贅沢と料理の贅沢という、二重の贅沢に満ちていた。ウージェーヌは、かつてこれほど贅沢な眺めを目撃したことはなかった」(*Le Père Goriot*, p.151)。

<sup>57</sup> *Ibid.*

<sup>58</sup> 『幻滅』においても、リュシアン・ド・リュバンプレがセナークル（清貧な青年たちで構成される芸術家グループ）から虚飾に満ちたジャーナリズムの世界に移行するのは、彼が娼婦の豪華な屋敷で最高級の料理を味わい、「贅沢の魔力にとらわれ、美食の虜になった」(*Illusions perdues*, p.408) ためである。

<sup>59</sup> *La Cousine Bette*, p.104.

れていた。[...] くすんだカラフは、角の酒屋の量り売りで買った安物ワインの  
見苦しい色を隠せていなかった。ナプキンは一週間前から同じものが使われてい  
た。要するに、あらゆるものに品位のない貧困がにじみ出ている<sup>60</sup>。

このように、バルザックは「品位のない貧困 (misère sans dignité)」を表象する料  
理を事細かく並べ立て、ヴォケー館と同様に、食堂の「吐き気を催す様相 (aspect  
nauséabond)<sup>61</sup>」を浮き彫りにしている。その一方で、すでに見たように、対極となる  
豪華な宴会の料理の内容に言及されることはない。ヴァレリーが準備する饗宴の場  
合、詳細なメニューの代わりに、彼女の補佐役ベットがやり繰り上手な「主婦の才  
能 (esprit de ménagère)<sup>62</sup>」に長けていることが強調されている。というのも、ベット  
は使用人に騙されないように毎朝、市場に通って食料品を安く買っているのだ。そ  
のおかげで「[一か月に] 千フランで6人分の豪華な晚餐を賄うという途方もない問  
題<sup>63</sup>」を解決することができた。こうした節約術はヴァレリーのブルジョワ的な性格  
を際立たせるものである。

さらに、ヴァレリーと恋人のヴェンツェスラス・ド・シュタインボックが逢引す  
る貸し部屋での場面でも、ブルジョワ精神が露呈する。二人はこの部屋を「楽園  
(paradis)」と名付けていたが、その部屋の様子は次のようなものだ。

シュタインボック伯爵が借りた楽園は、ペルシア絨毯が敷きつめられていた。  
柔らかな絨毯のおかげで、蟬引きの赤茶けたおぞましいタイルの床の冷たさや硬  
さも足に伝わってこなかった。家具は、二脚のきれいな椅子と、アルコーヴに嵌  
め込まれたベッドで、ベッドは食卓で半ば隠れていた。食卓には御馳走の残りが  
載っていて、首の長いワインボトルが二本と、氷に冷やしたシャンパンの瓶一本  
がヴィーナスに耕されたバッカスの野に並べられていた。炉辺椅子の横には、恐  
らくヴァレリーが運び込ませたと思える、上等な刺し縫いの肘掛椅子と、美しい  
縁取りの鏡がついたポンパドゥール様式のローズウッドの小奇麗な化粧筆筒が  
見えた<sup>64</sup>。

<sup>60</sup> *Ibid.*

<sup>61</sup> *Ibid.*, p.103.

<sup>62</sup> *Ibid.*, p.198.

<sup>63</sup> *Ibid.*

<sup>64</sup> *Ibid.*, p.420.



引用下線部の「おぞましい (ignoble)」「冷たさ (la froideur)」「硬さ (la dureté)」といった言葉によって、この「楽園」の偽りの卑俗な贅沢さが浮き彫りにされている。実際、語り手はヴィーナスとウルカノスの神話〔ウルカノスがマルスと密通している妻のヴィーナスを魚網で捕えたこと〕と比べて「卑小なスケールの不倫の愛<sup>65</sup>」がそこに刻まれていると断言している。したがって、この小説が『コンスティチューションネル』紙に新聞小説として連載された時、この場面の章タイトルが「1840 年パリのお手頃な楽園 (Le paradis économique du Paris de 1840)」であったのも当然のことであろう。そこにはブルジョワ化した娼婦、さらにはブルジョワ階級そのものへの作者の皮肉で侮蔑的な視線が投影されている<sup>66</sup>。

さらに、二人の恋人がメゾン・ドレ<sup>67</sup>から食事を取り寄せているように、この部屋はメゾン・ドレの個室を想起させる。ラルースの『19 世紀大辞典』において「個室 (cabinets particuliers)」は次のように定義されている。

個室 (cabinets particuliers) は、メゾン・ドレやカフェ・アングレ、カフェ・リッシュなど著名なレストランの主な魅力となっている。まさにそこで毎晩、夕食客、もっと遅い時刻には夜食客たちが魅力的な女性を伴って、上質で洗練された食事——牡蠣、シャンパン、トリュフ詰めヤマウズラ、ザリガニのビスクはメニューにいつも載っている——の献立を注文しにくる。パリのすべての道楽者たちがその常連である<sup>68</sup>。

<sup>65</sup> Ibid.

<sup>66</sup> バルザックは、クルヴェルがヴァレリーのために用意した屋敷と、ジョゼファの屋敷を比較して、次のように述べている。「ジョゼファの屋敷と (クルヴェルの) バルベ通りの屋敷との違いは、物の独自性と俗悪さとの違いにあった。ジョゼファの屋敷でうっとり眺めたものは、後者の屋敷にはどこにも見出せなかった。クルヴェルの屋敷で輝いているものはどこでも買えるものであった。[...] 本物のブールの燭台は、競売で 3000 フランまで値が上がるが、同じ型の燭台は 1000 フランか 1200 フランで製造できるだろう。一方はラファエロの絵が絵画において占める位置を骨董において占めているが、他方はその複製に過ぎない。[...] それゆえ、クルヴェルの屋敷は愚か者の贅沢の壮大なる見本であり、ジョゼファの屋敷は芸術家の住まいの最も素晴らしい見本であった」(Ibid., p.398)。

<sup>67</sup> 1841 年にレイ・ヴェルディエがブルヴァール・デ・ジタリアン通りに開いた高級レストランで、金箔の豪華な内装のためにメゾン・ドレ (Maison dorée : 金箔の館) またはメゾン・ドール (Maison d'or) と呼ばれ、ダンディたちが集まる場となった。

<sup>68</sup> Pierre Larousse, *Grand dictionnaire universel du XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, t.3, 1866-1876, p.17. 傍点の強調は作者によるものである。



ガヴァルニのカリカチュア（図2）が示しているように、当時、個室はしばしば逢引の場と化していた。カトリーヌ・ゴーチ=ランズの言葉を借りれば、個室は「エロティスムと美食の快楽が混じり合う逢引の密かな空間<sup>69</sup>」に変貌する。そして、「個室の役割はまさに、公的空間の中に私的領域の幻想を引き起こすことにあった<sup>70</sup>」。しかしながら、フローベールの『感情教育』やゾラの『ナナ』でのレストランの個室のエピソードが如実に物語っているように<sup>71</sup>、この私的空間は必ずしも人が入り込めない密室ではなかった。



図2：ガヴァルニ《外国人と地方人》、『パリの悪魔』第4巻（1869）より

『従妹ベット』の「楽園」に関しても同様である。この部屋は時間貸しで誰でも借りられる「多くの人々の楽園（le paradis de bien du monde）<sup>72</sup>」でもあり、アンリ・モンテスは難なくそこに入り込み、自分の眼でヴァレリーの裏切りを確かめることができた。それが彼女の死を引き起こすことになる。さらに、アンリがヴァレリー

<sup>69</sup> Catherine Gautschi-Lanz, *Le roman à table. Nourritures et repas imaginaires dans le roman français, 1850-1900*, Genève, Slatkine, 2006, p.122.

<sup>70</sup> *Ibid.*, pp.122-123.

<sup>71</sup> フローベール、ゾラの作品における「個室」については、Catherine Gautschi-Lanz, *op.cit.*, pp.126-130を参照のこと。

<sup>72</sup> *La Cousine Bette*, p.419.

の不実を知らされるのが、ロシェ・ド・カンカルでの娼婦たちとの夕食の席である。このように、バルザックは話の筋を展開させるために、物語の舞台として、娼婦たちがしばしば訪れるレストランを巧みに使っている。その上、ロシェ・ド・カンカルは牡蠣で有名な店で、牡蠣は昔から性欲を高める効力を持つとされている。それは17世紀オランダの画家ミーリスの絵画(図3)が示す通りで、牡蠣は「性欲と性交渉の象徴<sup>73</sup>」であった。それゆえ、バルザックが娼婦たちの夜会での料理に関して、牡蠣のみに言及しているのは偶然ではないだろう<sup>74</sup>。その点でも、ロシェ・ド・カンカルは物語の背景として最も適したトポスであった。



図3：フランス・ファン・ミーリス《牡蠣》(1661)

以上のように、本論では娼婦と食べ物、食事との関係を美食の観点、衛生学的、または社会的観点から検証した。それによって、食卓の表象における娼婦の果たす大きな役割が明らかになったと思う。それはこの当時、「身持ちの良い女性 (femme honnête) は美食の快楽から排除されていた<sup>75</sup>」だけに尚更である。このように、食欲

<sup>73</sup> Raphaëlle Roux, « Aphrodisiaques », in *Vermeer et les maîtres de la peinture de genre, Connaissance des arts hors-série*, 2017, p.50.

<sup>74</sup> ロシェ・ド・カンカルでの娼婦たちの晩餐は次のように描写されている。「7時に晩餐は牡蠣で始まった。8時になると、第一、第二サービスの間に冷えたポンチを味わった。全員がこの種の饗宴のメニューを知っていた」(*La Cousine Bette*, p. 407)。

<sup>75</sup> Karin Becker, *Gastronomie et littérature en France au XIX<sup>e</sup> siècle*, Orléans, Paradigme, 2017, p.140.

を満たすことと性的快楽が密接に結びついた『人間喜劇』の世界において、娼婦の存在は不可欠であったと結論できよう。

## 参考文献

### 1. バルザックの著作

Balzac (Honoré de), *La Comédie humaine*, Pléiade, Gallimard, Paris, 12 vol, 1976-1981.

### 2. 研究書、研究論文など

Aron (Jean-Paul), « Le dîner-spectacle au XIX<sup>e</sup> siècle », in *À Manger des yeux. L'esthétique de la nourriture*, Boudry-Neuchâtel, Editions de la Baconnière, 1988.

: *Le mangeur du XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Belles Lettres, 2013.

Becker (Karin), *Gastronomie et littérature en France au XIX<sup>e</sup> siècle*, Orléans, Paradigme, 2017.

Berthier (Patrick), « Chez Balzac les illusions se perdent à table », *Le roman et la nourriture*, Presses Universitaires de Franche-Comté, 2003.

Berthier (Philippe), « Les Diaboliques à table », dans *Figures du fantasme. Un parcours dix-neuviémiste*, Toulouse, Presse Universitaires du Mirail, 1992.

Brillat-Savarin, *Physiologie du goût*, Paris, Flammarion, 1982.

Brown (James W.), *Fictional Meals and Their Function in the French Novel, 1789-1848*, Toronto, University of Toronto Press, 1984.

Courtine, *Balzac à table*, Paris, Robert Laffont, 1976.

Dubois (Philippe C.), « Savarin/BalZac : Du goût des excitants sur l'écriture moderne », in *Nineteenth-Century French Studies* 33, Nos. 1&2 Fall-Winter 2004-2005.

Gasnault (François), *Guinguettes et lorettes. Bals publics à Paris au XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Aubier, 1986.

Gaubert (Paul), *Hygiène de la digestion, suivie d'un nouveau dictionnaire des aliments [sic]*, Liège, Lardinois, 1849.

Gautschi-Lanz (Catherine), *Le roman à table. Nourritures et repas imaginaires dans le roman français, 1850-1900*, Genève, Slatkine, 2006.

- Jouve (Vincent), « Lire la nourriture », in *Nourritures et écriture*, Tome II, *Littérature d'expression française*, Nice, Université de Nice-Sophia Antipolis, 2000.
- Lange (Frédéric), *Manger ou les jeux et les creux du Plat*, Paris, Seuil, 1975.
- Larousse (Pierre), *Grand dictionnaire universel du XIX<sup>e</sup> siècle*, t.3, 1866-1876.
- Muhlstein (Anka), *Garçon, un cent d'huîtres ! Balzac et la table*, Paris, Odile Jacob, 2010.
- Przyboś (Julia), *Les aventures du corps masculin*, Paris, Corti, 2012.
- Raisson (Horace), *Almanach perpétuel des gourmands, contenant le Code Gourmand*, Paris, J.-N. Barba, 1830.
- Rosen (Elisheva), « Le festin de Taillefer ou les « saturnales » de la Monarchie de Juillet », in *Balzac et La Peau de chagrin*, Paris, Société d'édition d'enseignement supérieur, 1979.
- Roux (Raphaëlle), « Aphrodisiaques », in *Vermeer et les maîtres de la peinture de genre, Connaissance des arts hors-série*, 2017.
- Zola (Émile), *Nana*, Paris, GF Flammarion, 2000.

村田京子「バルザック『ラ・ラブイユーズ』のタイトルを巡る考察」、『バルザック、フローベール 作品の生成と解釈の問題』、Global COE Program「テキスト布置の解釈学的研究と教育」第2回国際研究集会報告書（名古屋大学大学院文学研究科刊行）、2008年。

## Résumé

### Table des courtisanes dans *La Comédie humaine*

Kyoko MURATA

On va traiter d'abord le banquet de Taillefer dans *La Peau de chagrin* (1831). Tandis que Balzac est sobre en paroles sur les plats servis, quant au dessert, il énumère plusieurs fruits avec les termes qui suggèrent le corps voluptueux des femmes. C'est là une façon d'annoncer l'apparition des courtisanes après le dessert. On peut aisément voir un parallèle entre les fruits et les courtisanes, si bien qu'elles deviennent une sorte de nourriture offerte aux hommes. Aquilina et Euphrasie, mises en relief parmi les courtisanes, appartiennent à la catégorie de la « vraie courtisane », celle que Balzac associe souvent aux termes : « manger » et « dévorer ». Bien que réduites au statut d'objets de consommation, ces courtisanes deviennent en même temps dévoratrices de la fortune et de la vie des hommes, voire de leur propre vie.

Dans *La Rabouilleuse* (1841), l'auteur met en scène Flore Brazier. Flore apparaît aussi comme une femme-fruit voluptueuse, mais pour mieux dominer son maître Rouget, elle pénètre les secrets de la gastronomie. D'ailleurs, elle cherche à neutraliser l'ardeur des sens du dernier à force de bonne chère. Là, Balzac semble obéir au discours médical des hygiénistes de l'époque qui associent vie sexuelle et régime alimentaire. D'après le discours médical, faire trop manger, équivaut à castrer. Rouget finit par mourir par excès alimentaire ou sexuel.

Enfin, dans *La Cousine Bette* (1846), Valérie Marneffe, en tant que « courtisane mariée », se distingue par son hypocrisie de la « vraie courtisane ». Et loin de dévorer la fortune, elle accumule des richesses. Là se produit l'embourgeoisement de la courtisane. Sur ce point, on peut observer chez Valérie la même ascension d'ordre gastronomique que chez les jeunes ambitieux dont Rastignac. Or Balzac souligne l'esprit d'économie de Bette, complice de Valéry ; ce qui trahit le caractère bourgeois de la courtisane mariée. En témoigne aussi la scène où Valérie et Wenceslas se rejoignent clandestinement dans une pièce en location. Qui plus est, cette pièce nous rappelle un cabinet particulier de la *Maison dorée*. En nous référant aussi au dîner des lorettes dans *Rocher de Cancale*, on peut dire que Balzac se sert admirablement de ces lieux fréquentés par les courtisanes pour le déroulement de l'action.

Ainsi comprend-on que dans *La Comédie humaine* où l'assouvissement alimentaire et la jouissance sexuelle ne sauraient être séparés, la présence des courtisanes soit indispensable.